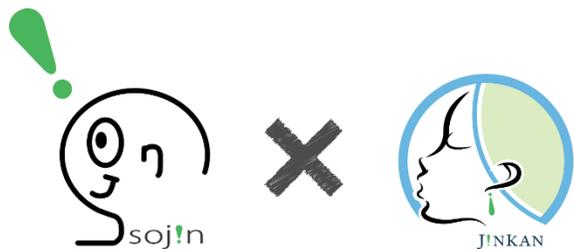


# 「研究を他者に語る」の先へ

## ——学際と教養の未来を考える

「総人のミカタ」特別企画

2018.03.02（金）総合人間学部棟1102講義室



# シンポジウムの趣旨

- ▶ 今年度の4月から始まった総人のミカタの取り組みを整理・紹介
- ▶ 総人のミカタを通して得られたものを共有し、これからの展開を考える
- ▶ 総人、人環という部局固有の問題をより広い文脈に

# 本日の流れ

- ▶ シンポジウムの趣旨説明
- ▶ 第一部 総人のミカタの一年
  - ▶ 総人のミカタの活動報告
  - ▶ 総人のミカタからの問題提起
- ▶ 第二部 「研究を他者に語る」の先へ
  - ▶ 杉山雅人「いかに語り、伝えるか－専門領域と学修段階の違いを越えて－」
  - ▶ 成瀬尚志「ソーシャルアクションとしての研究」
  - ▶ パネルディスカッション
- ▶ 全体ディスカッション

# 総人の三カ月の一年——活動報告

## ▶ 活動報告

- ▶ 活動背景——「研究を他者に語る」を中心に
- ▶ 実施概要
- ▶ 実施記録
- ▶ その他の活動

# 活動背景としての「研究を他者に語る」

- ▶ 「専門性」を突き詰めるだけでなく、自身の専門分野／研究を非専門家（＝一般市民）に説明すること
- ▶ 多様な分野の教員が所属し、なおかつ一般教養教育を担当する部局という特性を活用
- ▶ 他者の視点を獲得することによる自己相対化の促進
  - ▶ 現在、学部4回生による異分野教員への卒論発表と博士後期課程在籍者による「教養教育実習」が実施されている

# 「教養教育実習」の拡張として...

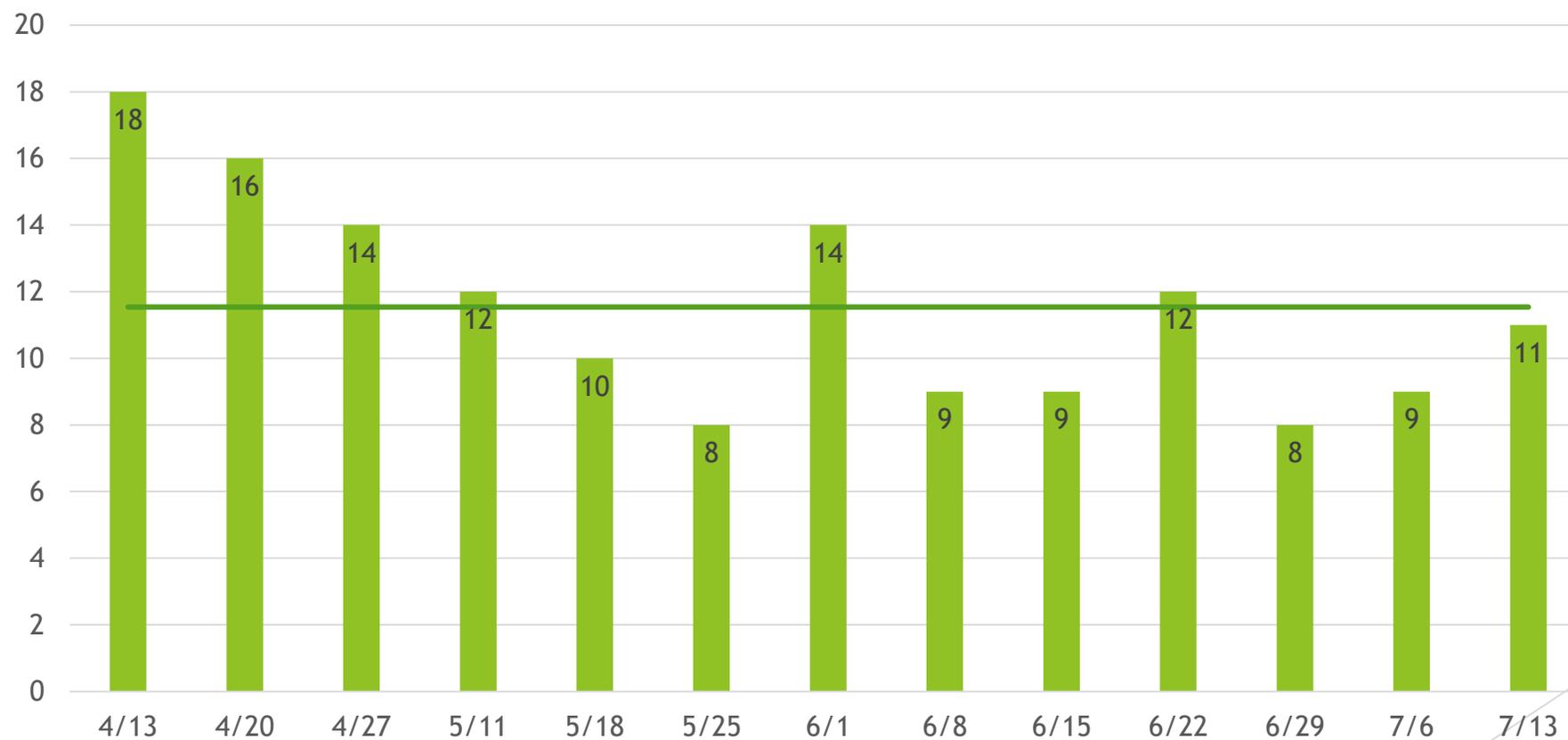
- ▶ 指導教員によるフィードバックに限定された1回きりの「教養教育実習」
- ▶ 部局の特性をより活用し、部局の問題に応じたデザインの可能性
  - ▶ 多様な分野が揃うこと
  - ▶ 他の研究室との関連の薄さ、学生間、学部・大学院間の結びつきの薄さという問題（→ チューター的機能）
- ▶ 院生の自主企画として、2017年4月から活動を開始
  - ▶ 学際教育研究部からの後援

# 実施概要

- ▶ 前後期とも、合計13回実施（木5、総人棟1102講義室）
  - ▶ 初回はガイダンス
  - ▶ 5名の院生で2回の模擬講義
  - ▶ ディスカッション2回（2名と3名で1回ずつ）
  - ▶ 模擬講義（60分）、交流会（30分）、検討会（60分程度）
- ▶ 講師は毎回コメント、全講義終了後に総括コメントを提出
  - ▶ 前期途中より、異分野の院生による質疑応答
  - ▶ 後期より、異分野の院生をアシスタントにして講義後コメント
  - ▶ 講師コメントとアシスタントコメントはwebに掲載

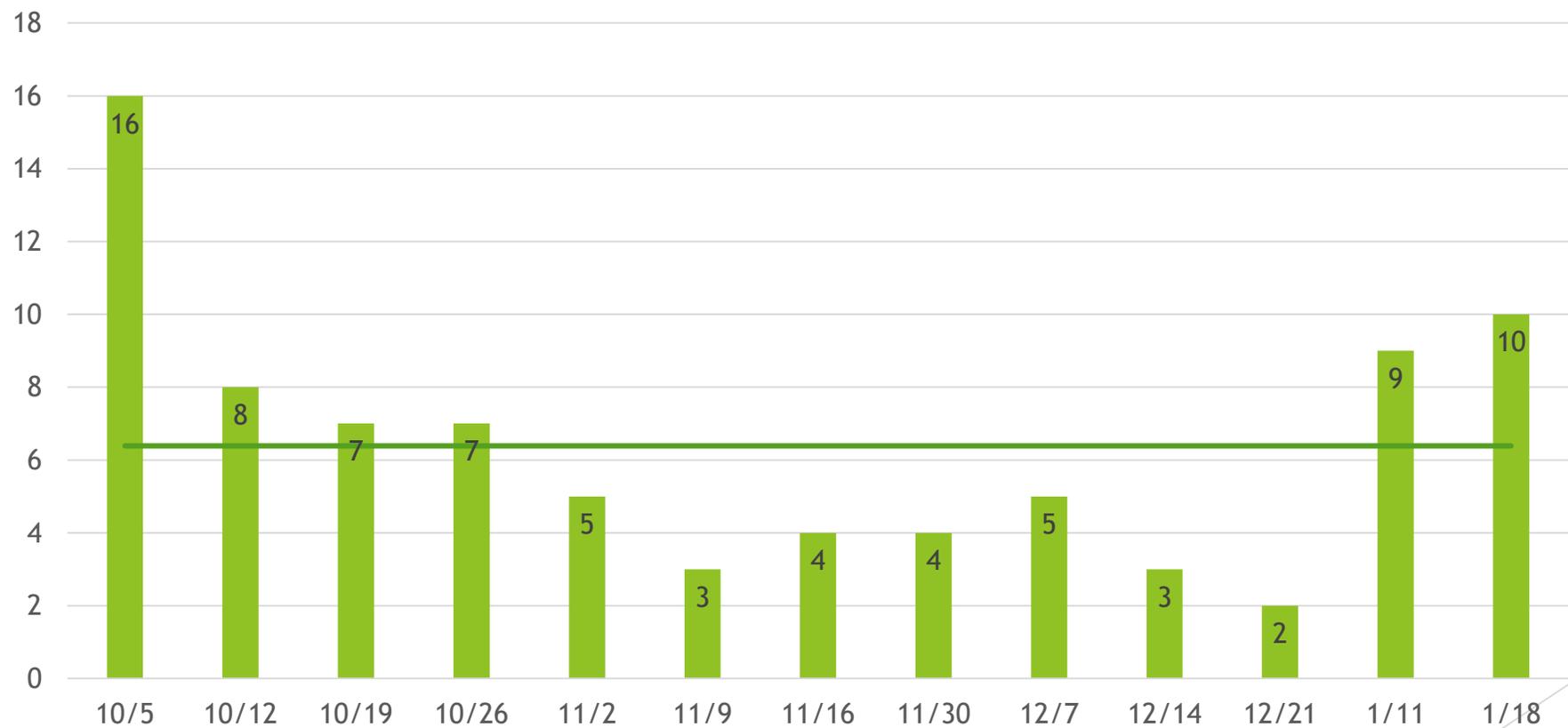
# 実施記録

前期参加人数



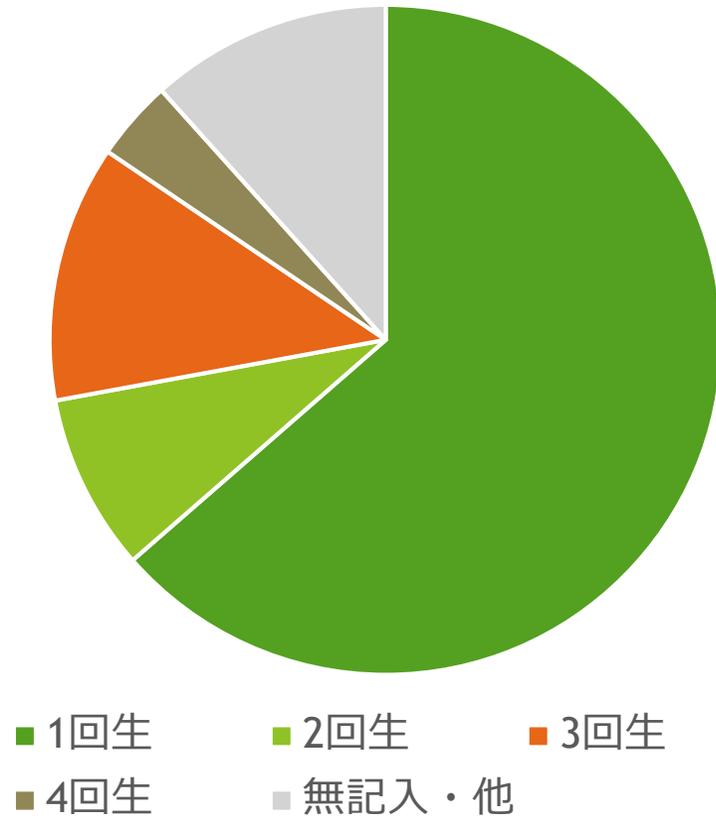
# 実施記録

後期参加人数

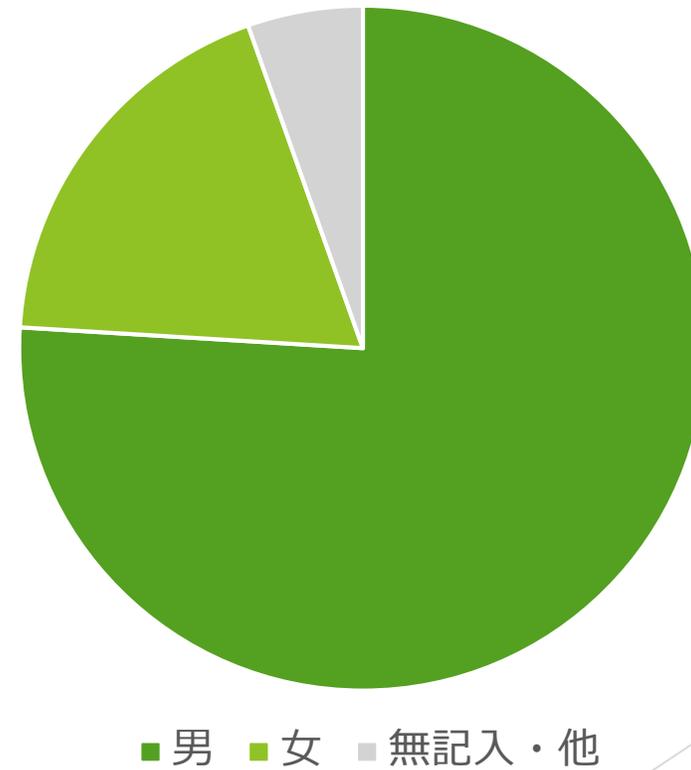


# 実施記録（前後期累積・講義回のみ）

参加学年



性別



# 実施記録

## ▶ その他の記録など

- ▶ 通年で10回以上（講義のみ、計20回）出席した学部生が3名
  - ▶ 後期や終盤でも、初参加の学生が一定数存在
  - ▶ アンケートでの講義内容に関する質問の回答は、正に偏って分布
  - ▶ 交流会の時間にも講義内容についての質問や補足などが頻出
- 
- ▶ 院生のコメントについてはwebを参照のこと

# その他の活動

- ▶ 学際研究着想コンテスト（学際融合研究教育推進センター）への応募、一次審査通過
- ▶ 大学教育学会（2017.12.02）でのポスター発表
- ▶ 総人卒業生をゲストに迎えた特別企画（2017.12.16）
- ▶ 総人広報、らいふすてーじ（生協機関誌）での記事

# 決算報告

(会計担当：須田)

## 収入

- ▶ 寄付金 12500円
- ▶ 懇親会参加費 18000円
- ▶ 合計 30500円

## 支出

- ▶ お茶菓子代（前期） 9716円
- ▶ 懇親会費用（前期） 16986円
- ▶ お茶菓子代（後期） 7171円
- ▶ 合計 33873円

収支の総計： -3373円

# 総人のミカタからの問題提起

- ▶ 「研究を他者に語る」ことによる自己相対化という理念
- ▶ 自己相対化 = 自分の「立ち位置」の反省をめぐって二つの提案
  1. 自己相対化を整理する
    - ▶ ここでいう自己相対化とはどのようなものか？
    - ▶ 自己相対化だけでいいのか？
  2. 自身の捉え返しとしての総人史・学際史

# 自己相対化にはどんな方法がありうるのか

- ▶ 学部生に対する説明を通じた自己相対化
  - ▶ かみ砕いた説明による知識的な理解の促進
  - ▶ 専門家–非専門家の距離感を把握
- ▶ 院生同士での対話を通じた自己相対化
  - ▶ 相互のコメントによる分野間の視点の違いの顕在化
  - ▶ 学問的な位置関係（目的や手法の差異）を把握
- ▶ 異なる専門性をもつ複数の「他者」の視点
- ▶ 二種類の質的に異なる相対化 = 自省性（reflexivity）

# 自省性だけでいいのか

- ▶ 「他者に語る」だけでなく、「他者を聞く」という方向性
- ▶ 「他者」の語りの要点を掴む能力 = 適合性 (adequacy)

cf. 「熟達 (mastery) と適合 (adequacy) の違いは、専門分野〔の研究〕を実践するために専門分野を学ぶことと、その専門分野がどんな特徴的なやり方で世界を見ているか——その観察のカテゴリー、キーターム、関与的だとみなされている方法とアプローチ——を把握 することの違いである」 (Klein 1996, 212)

- ▶ 「研究を他者に語る」ことを通じた専門家—非専門家間のコミュニケーションの実現

# 小まとめ



①②...自省性、③...適合性

# 自身の捉え返しとしての総人史・学際史

- ▶ 自身の専門分野を相対化するだけでいいのか
- ▶ 自身の所属する学部の置かれた文脈を捉えかえす機会の必要性
- ▶ 瑞慶覧の講義（2017.11.30）における導入
  - ▶ 学際史・総人が設立される経緯の概説
  - ▶ ミカタの講義目標からは外れたものの、参加学生からは好評

# 共時的な視点と通時的な視点

- ▶ 「研究を他者に語る」という理念と「国際高等教育院問題」
- ▶ 教育院問題の当事者ではない学生／院生にとって、この理念に説得力はあるのか？
- ▶ 形骸化を防ぐための方法の一つとしての歴史的な視点の獲得
  - ▶ 論文内で先行研究に言及するのも、自分の研究を歴史的に位置づけるための所作の一つ
  - ▶ 学部・研究科の歴史を知る = 通時的な自分の「立ち位置」を知る

# 総人のミカタからの問題提起（まとめ）

- ▶ 「研究を語る」相手となる他者の複数性
  - ▶ 学部生：専門知の非対称性（一般市民との対話）
  - ▶ 院生同士：学問の地平を共有したうえでの偏差 →学際研究
- ▶ 「他者に語る」と「他者を聞く」こと
  - ▶ 他者の視点の要点を掴む能力としての適合性
- ▶ 自分の立ち位置を歴史的に把握すること
  - ▶ 学部・研究科の歴史を知ることによる通時的な視点の必要性